

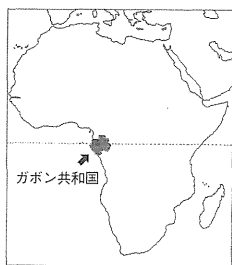
## ガボンの幼児教育 JICA（青年海外協力隊）に参加して

西垣友恵  
（大学院生）

私は、二〇〇九年からの二年間、幼児教育の青年海外協力隊として、ガボン共和国で活動しました。「ガボン共和国」は赤道直下、中部アフリカに位置し、熱帯雨林気候で国土の85%が森林に覆われており、多種多様の動植物が豊かに生きる国です。以前はフランスの植民地で一九六〇年に独立。そのため公用語はフランス語ですが、ガボン国内で四十以上の民族・民族語が存在するといわれています。森林・石油資源が豊富なため、アフリカ諸国の中では中進国といわれていますが、都市と地方との格差は大きいのが実態です。

首都リーブルヴィルから車で約十二時間の距離にあるチバングの教育省管轄の事務所に配属になり、ガボン人の同僚と、幼稚園の先生の先生」という立場で、①六つの公立幼稚園の巡回視察、②講習会の企画・実施（補助）、③現地教諭の技術・知識のサポート、が主な仕事でした。

ガボンでは小学校でも留年率が高く、発達



西垣友恵（にしがきともえ）  
お茶の水女子大学附属幼稚園 元教諭。現在は東京藝術  
大学修士課程在学。

段階に応じた適切な指導内容・方法の確立、カリキュラムの改善、現地教諭への技術的な支援が求められました。

## ガボンの幼稚園

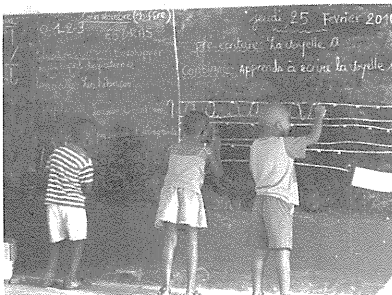
ガボンの幼稚園が始まったのは、今から約十五年前。カリキュラムは、宗主国であったフランスのシステムがそのまま入っており、年齢は日本と同じく三〜六歳（〇歳からの保育所も別の管轄で存在する）。教育課程は小学校の前段階のような授業で、日本の幼児教育のような「あそび・生活から学ぶ」というものではなく、読み書き、数字が重視され、丸々復唱したりする授業内容。公立は授業料が無料で、教員免許は幼稚園・小学校共通です。また、実際に私自身がつけた記録からは、次のような現状が見て取れました。

・実際の授業は、カリキュラム通りではない（特に情操教育（運動・音楽・美術）的な

ことは後回しにされるため、行われないことがある）。

・教科書、椅子・机などの物・資材が不足。  
・ほぼ毎年、教職員のストライキが行われる（国が給料の支払いを遅延するため）。  
・担任1人に子ども10〜40人（園による）。

幼稚園では授業中、皆、黒板を向いて座り（じっと集中なんて大変！）、小さなミニ黒板をノート代わりに、今書いている文字が何か理解できていないまま書き続けている子もいたり、実体験として伴わず、子どもたちの身に入っていない様子もしばしば見受けられました。興味関心も



▲年長組の授業

関係なく教えるというやり方……。子どもたちが少しでも生き生きとできる、取り組めることを何かできたらなと思いました。

私にできることが……。私にできることが……。私にできることが……

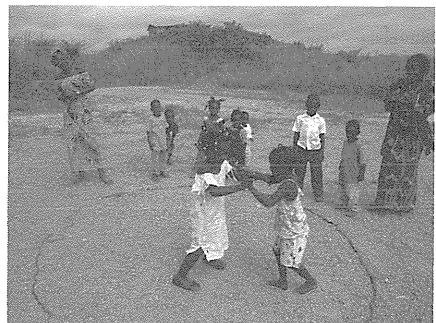
そんな中で私にできることを見つけるのはとても困難でした。当時、まだ日本でも幼稚園教諭として四年しか働いていない私が、言語も文化も教育内容も違う国で先生の先生などとという厚かましい身分で活動しなければならず、現地の先生たちは、この国で自分たちがやってきたことに誇りを持っており、アンケートを取ると、先生たちは皆、「子どもたちに『成功』してほしい」「夢を実現させてほしい」という願いを持っていました。

まずは身近にある物で視覚的に学びやすくなるような教材を作ったり、簡単にできる運動遊びや製作を提案したりしてみました（段ボール製のカルタ、数の概念や実物を感じら

れるような物の利用、端切れの布でロープを作り、大縄跳びの縄や相撲の土俵にする等)。また、私の知っている技法をノートにまとめ、できることを可視化しました。

すると、それを見て、「これやってみたい」と放課後、積極的に先生たちが集まって製作勉強会をするようになり、私もガボンの手遊びや歌を教えてほしいと頼むと、喜んで教えてくれました。

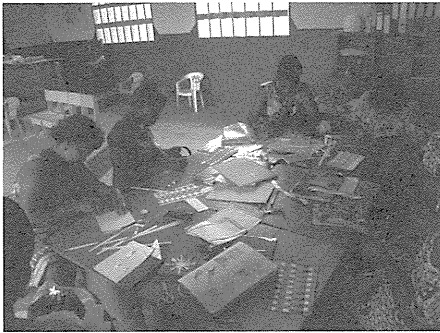
また、毎月のカリキュラムのテーマに沿った内容や、日本のものを紹介する講習会を、同僚と共に企画実施しました。すると、その講習会で行ったことを少しずつ授業の中で活



▲「相撲」－端切れの布製ロープの土俵で

用してくれる先生も現れ、物がなくてもポケットマネーで材料を買って、まず自分が作ってみたい、自分の技法集を作り始める人も出てきました。

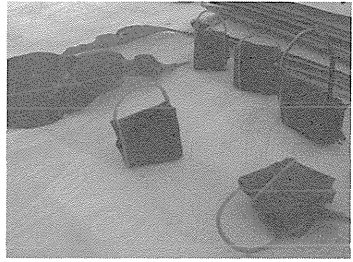
ある先生と一緒に、子どもたちが自分の名前が読めるようにと、カバン掛けと机に一人ずつの名前を貼ってみたところ、一人の子どもが読めるようになっていて、その瞬間を一緒に見て共に喜び合ったり、教師という同じ視点で先生たちとも気持ち重なる場面が一つずつ増えていくことは、私にとっても一歩前進できたような、うれしい瞬間でした。



▲やる気のある先生たちの放課後勉強会

## ガボンの子どもたち

ガボンの子どもたちは、はじめ、外国人の私に対してちょっと遠くから恥ずかしそうに（警戒もしつつ？）見ている子もいましたが、休み時間に全身を使って一緒に遊び、気持ちがあぐれてくると、くるくるした目につこり笑って自然に手をつないできたり、人懐こく話してきたり、ひょうきんなそぶりを見せたりしてくれました。ダンスの動きは抜群で、中でも上手な子は周りのみんなから一目置かれる存在でした。また、ある女の子は、おばあちゃんから教わったというマンゴウの葉を使った小さなカバンの作り方を教えてくれ、みんなでたくさん作ったりしました。日本の子どもたちと同じくかわいくて素朴で、茶目つ気と愛嬌がたっぷりあります。新しい製作をしたり、思いのままに何かを作ったりするときの表情は、やっぱりいい顔をしています。



▲マンゴーの葉っぱで作った小さなカバン

たちが生き生きとやる気を持って取り組み、それに私も少しでも役に立てたなら、とてもうれしいことでした。そして「教育」の重要性と可能性を痛感しました。

それぞれがそれぞれの教育のやり方でいいのだと思いますが、帰国後も幼稚園に勤め、日本の幼児教育の良さを実感している今、やはり子どもという尊い存在とそこにかかわる保育者・教師のまなざし、環境、子ども同士によって、子どもたちの力はどこまでもぐんぐん伸びていくのだなと思います。

この国のこと、いろいろな状況、ましてや教育を変えるなんてことは容易ではありませんが、一人でも多くの子どもたち、先生

教師が子どもに願っていることはどこでも同じで、世界中の子どもたちが明るく夢と希望を持って、やりたいことをやりたいままに追求、探求していける環境とチャンスを整えるために、教師、大人たちも最大限の力を発揮し、共に与え、与えられながら、成長しなければと思います。この人生を未来の子どもたちと共に大いに笑えるように、私も少しでも何かできるように行動していきたいです。

